

## 患者さんに関わるということ

三重県立桑名高等学校  
衛生看護科 3年 西谷 胡十

「私は、患者さん一人一人と向き合い、それぞれに合った看護が提供できるよう、日々努力することを誓います。」

これは昨年、初めての病院実習が始まる前に、戴帽式で私が誓った言葉です。今思い返してみると、この時の私は「一人一人と向き合う」「個性のある看護」とは何なのか、また「患者さんと向き合い、その人にあった看護を提供すること」がどれほど難しいことなのか、はっきり分かっていなかったと思います。実際、私の気持ちも、不安や緊張感より患者さんに関わらせていただけることへの期待の方が大きかったからです。しかし、この二週間の実習で、身をもって自分の未熟さや命の尊さを感じることになりました。そして、この実習で出会い、大切なことを教えてくださった一人の患者さんのことを、私は忘れることができません。

実習初日から三日間は、看護師さんの援助を見学させていただきました。とても素早くかつ丁寧なその援助を目にして、私もこのように手際よくできるようになりたい、早く患者さんに関わりたいと強く思っていました。私たちが実際に患者さんを受け持たせていただいたのは四日目からでした。そして私はすぐに自分の考えの甘さに気付かされることになりました。患者さんのバイタルサイン測定を行った時、酸素飽和度の値が正常値より低かったことがありました。その時の私は、患者さんの普段の値と変わらなかったため、異常な状態ではないと考えてしまいました。指導者さんに「状態が安定しているだけではなく、他に観察

してくることがあるのではないかな」と助言を頂き、さらに学習を積み重ねることが必要であると強く感じました。この経験を通して、正常値か異常値かを知っているだけでは何の意味もなく、「値が高い時や低い時に、どこにどのような症状が現れるのかを知っておくこと」また、「どんなに小さな変化でも見逃してしまうと、患者さんの命という大きなものに影響があるため、目で見て観察することが重要であること」ということを、改めて理解することができました。命というものを身近に感じたことで、校内実習にはなかった緊張感を覚えたことを思い出します。

また、癌の患者さんを受け持たせていただいた時にも貴重な経験をすることができました。この患者さんは、自立されており笑顔が多い患者さんでした。自分の疾患や治療についても、私たち学生に説明してくださるほど理解されていたため、私は笑顔に隠された本心に気付かず、患者さんが前向きに治療に専念されているとばかり思い込んでいました。ある時、患者さんと来年の夏の話になったことがありました。「その頃には僕はもういないね。」という言葉聞いた時、私は頭の中が真っ白になりました。患者さんの顔を見ると、そこにはいつもとは違う、とても寂しそうな笑顔がありました。なんと声をかけたら良かったのだろうか、息をするのも忘れるくらい何も考えられなかったことを覚えています。私は涙を堪えることで精一杯で、病室を出た時には我慢することができず、涙がポロポロとこぼれてきました。実際に患者さんの口から死に関する言葉を聞いたショック

や、何より看護学生として見逃してはいけない患者さんの不安の声に、答えられなかった自分への不甲斐なさを感じたからです。この時まで、私はこの患者さんに何ができるのか、何が必要なのかを理解することができていなかったと思います。ようやく「患者さんと向き合う」とはどのようなことなのかについて、少し理解できたような気がしました。そして、この患者さんに必要なことは、何かの介助をするということではなく、会話の中で少しでも病気に対する不安を取り除くことだったのではないかと思いました。次の日、患者さんの足に浮腫がみられたため、足浴をしながらマッサージをすることを計画しました。その時には患者さんとたくさん話をして本心を聞こう、不安な気持ちを少しでも軽減できるようにしようと考えていましたが、話の切り出し方が分からず、何も聞くことができませんでした。結局、患者さんから聞いたことは「腫瘍が小さくなって嬉しかった。」ということだけでした。足浴が終わったとき、患者さんは涙を流しながら「こんなに親切にしてくれてありがとう。」とってくださいました。手際も悪く、時間もかかってしまいましたが、患者さんのことを考えていたことが少しは伝わっていたのかもしれないと思うと、この時の患者さんの顔と言葉を私はこれから先も忘れることはできないと思います。

この実習を通して、私は多くの命に触れることで、一人一人と向き合うということは口で言うほど簡単ではないことを実感しました。看護師とは命に関わる、責任のある仕事であるということを改めて感じることができました。その後、学校の勉強も進み、実習を思い出し患者さんのことを考えることがあります。あの時、患者さんは私たちや誰か他の人に自分のことを説明することで、自分の状態を理解して、癌であることを受け入れようとしていたのではないだろうか、そうであれば無理に本心を聞き出そうとしたことは、あまりにも軽率だったのではないかと思えます。今になって患者さんの言葉一つ一つに耳を傾け、気持ちを

理解できていればという後悔が押し寄せてきます。でも後悔ばかりしていても自分の成長に繋げることはできません。私はこの経験を通して、患者さんの気持ちに寄り添うために、患者さんと一緒になって治療に向かえるような、共に頑張れる看護師になりたいと思うようになりました。今回の実習で、私たち学生に看護というものを教えてくださった指導者さん、そしてなにより、本当は自分の治療に専念したいはずであるのに、私たちの実習を承諾してくれた患者さんには、大切なことに気付かせていただき、感謝してもしきれません。この二週間の経験は、私の中で絶対に忘れることができない経験になりました。自分の理想とする看護師になれるように日々努力することを、私はもう一度誓いたいと思います。